

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第70号 2016年3月

発行人：吉田 博行 編集長：地田 博昌 事務局長：安藤 孝
事務局：〒152-0002 目黒区目黒本町6-4-16 Tel 03-3716-7477

2016 年新年会を開催

2016年目黒稲門会新年会は、1月17日(日)午後4時から目黒雅叙園にて開催され、会員・ご家族67名、来賓4名、チアリーダー2名、招待現役学生2名、計75名が参加した。

笠谷興一朗幹事の司会で、第1部講演会では、岩崎 巖様(昭24政経)を招いて、「歌と人と一応援歌・学生歌を作詞して」と題した講演が行われた。『ひかる青雲』と『早稲田の栄光』に付き、時代背景やエピソードを織り交ぜて話して頂いた。特に、戦地から帰られた復員学生達が歌った慶応の応援歌は、生きていることの喜びを歌い上げていること。それに対抗する早稲田の歌を、軍歌調でなく、早稲田の森に青春を捧げた誇りの歌、血潮たぎる歌にしたこと。などなど、1時間に渡る熱弁だった。(詳細は次号に掲載予定)



講演の余韻の残る中、来賓の竹沢応援部監督、現役チアリーダー2名(安田愛さん、牟田真緒里さん)のリードで、『ひかる青雲』を全員で斉唱した。言葉の一つ一つを噛みしめ、青春を思い、涙の込み上げる感動の場面だった。講師を囲んで関係者の記念撮影が行われ、暫し休憩の後第2部懇親会に入った。



再び笠谷幹事の司会で、吉田会長から挨拶があった。

(会長挨拶)



「明けましておめでとうございます。

昨年は、嬉しい話題、暗い話題と各方面でいろいろありました。その中でスポーツ界は心踊るニュースが続きました。今年はオリンピックの年です。東京オリンピックの前哨戦として日本選手の大きな活躍を期待したいところです。

目黒稲門会におきましても、会員の皆様とともに日本選手団の活躍を応援しつつ、大いに稲門会ライフを楽しもうではありませんか。囲碁・カラオケ・食べ歩き・ゴルフ・ウォーキング・麻雀・美術歴史鑑賞・旅行・若木会・俳句・ボランティア・早稲田スポーツ観戦・さん月会の13の部会と広報委員会が各部会長のご尽力の下で活動しています。

本年はそれぞれの部会のさらなる充実を目指して行きます。まだ参加されていない皆様の参加をお待ちしています。

母校早稲田大学は2032年の創立150周年へ向けた将来計画“WASEDA VISION150”に基づいて、大胆な改革戦略とプロジェクトを進めています。その一環として2019年に新記念会堂(仮称)をスポーツミュージアムや学習スペースなどを併設した記念会堂の伝統を引き継ぎ最新的多機能型スポーツアリーナとして建設します。旧記念会堂は1957年に母校創立75周年を記念して竣工し、58年もの間、正規授業や体育各部の活動場所とし、また入学式や卒業式の会場として、そして東京オリンピックでフェンシングの競技会場として利用されたことは皆様もご記憶かと存じます。

目黒稲門会は、このような母校の活動を出来る限り支援してゆきたいと思えます。会員とご家族皆様

特別記事

この記事は、平成28年1月17日、目黒稲門会新年会での「ひかる青雲」「早稲田の栄光」等の作詞者、岩崎 巖様の講演内容です。(編集委員会)



歌と人と——応援歌・学生歌を作詞して

講演：岩崎 巖(昭和24年 政経)

昭和20年終戦後、東京六大学野球が復活し、昭和21年の早慶戦では慶応が新しい応援歌「我ぞ覇者」(藤浦洸作詞、古関裕而作曲)を歌い出し、その4番「好くぞ来たれり 好敵早稲田～おお打てよ 砕け早稲田を倒せ～」の歌が3塁側から1塁側の我々に矢のように飛んでくる。これに対し早稲田は、伝統ある「紺碧の空」(住治男作詞、古関裕而作曲)で対抗した。今は大隈講堂から大隈会館に向かう所に記念碑がある。古関先生は、この歌の「覇者 覇者」の作曲にご苦労されたという。

昭和22年、早稲田の応援部が学生から新たな応援歌を募集した。募集要項では、「早慶戦に歌う歌」、「試合中に元気付ける歌」、「勝った時の歌」のどれでもよいというものである。私は勝った時に歌うことをイメージして投稿した。「ひかる青雲」。北原白秋の影響を受けた題名。ソフトな歌詞とし3番まで。まもなく代表委員の高岡さんから早慶戦の歌詞を入れて欲しいと言われ、4番を付け加えた。「競う青春誇りの歌よ 慶応倒し意気上げて この歓びを歌おうよ」。勝って歌うので、歯ざしりする必要がない。

この頃、応援部には高岡さんと角南(すなみ)さんの2人のキャプテンがいたようだ。高岡さんは、にこやかで素朴な人柄。角南さんは、さっぱりした快活な人で、海軍航空隊の特別攻撃隊員だった。高岡さんも私も陸軍だった。当時は復員学生がたくさんいた。

昭和22年10月25日、新作応援歌発表会。大隈講堂1階2階とも満席で、グリークラブの長尾要(かなめ)さん(外岡さんの兄)がステージに立って「ひかる青雲」を独唱した。長尾さんは陸軍のパイロットで台湾から帰還した。テノールで朗々と歌い上げ、大喝采。早稲田の人材の多彩さと奥深さを感じた。

☆

私の家は戦時中、横浜から土浦に疎開した。戦後、陸軍から土浦に帰り、友人に誘われ草野球を楽しんだ。練習場所は丘の上の古い木造平屋の小学校のグラウンド。ふるさとのような風景だった。満開の桜散るグラウンドで野球をやる。桜吹雪の中をボールが飛んでくる。「ああ、おれは生きている。」と感じた。軍隊では昼夜死を覚悟の攻撃訓練をしていた。「どんな死に方をするのか。」と話し合っていた。「ひかる青雲」には生の讃歌が無意識のうちに秘められていたと思う。早稲田も慶応もなく、生きている歓びをこめて歌い合ったのが、あの頃の早慶戦だったと思う。

高岡さんは箱根で旅館を営んでいて、町会議員や観光協会の会長を務めた。ある日電話をもらい、昔話をしたが、その直後ファックスが届いた。「ひかる青雲」についての思い出が書かれていた。

『ついつい思い出長話、すみません。さて、50年の話、思い出るままに綴りたい。終戦後、六大学野球の応援に新しい応援歌が作られたが、大半は軍国調であった。昭和22年に校内の掲示板に募集の広告を出した。文学部の服部先生に選者を依頼し、岩崎さんの歌が選ばれた。しかし、作曲をお願いする古関先生と人脈ある知人がいない。私と後輩の部員とで古関先生宅を訪れた。やがて先生から、出来たとの知らせに、小田急の豪徳寺駅で降り、一刻も早くと下北沢まで2人で駆けて行った。先生はピアノで弾いて歌って下さって、奥様は当時貴重なお汁粉を作ってくれた。忘れられない。作曲料は早慶戦の内野券数枚。金銭を度外視したものだ。感謝感激。

大隈講堂での新作「ひかる青雲」発表会の準備を進めていた。何人来てくれるかが心配だ。費用はどうするか。甘泉園での練習後、連日、新宿の国鉄の地下道に行き、「応援歌の発表会です。是非、早稲田ファンの皆様」と言って連日切符を売った。ある若い奥さんが切符を1枚買って、優しい声で、「私は家事があり参上できない。あなたのガールフレンドに差し上げます。」と差し出され、返すお礼の言葉もなく、ただ、頭を下げるのみだった。

また、数人の某女子専門学校生のメンバーにも頼んだ。友人にもと数十枚の切符を買ってくれた。その中の1人、榊原久子女史はその後文学部に編入し、産経新聞の記者となった。未だに先輩後輩の仲だ。「ひかる青雲」の秘められた友情の1コマだ。

この秋から神宮で歌われ、昭和23年の早慶戦、明治との優勝決定戦にも歌われた。そのときの血潮は未だに体にある。命を捧げ、人生を捧げた誇りをもたらしている。学友の早稲田の森の中で、心から語り合える岩崎さんと人生の最後まで交友を深めたい。

当時部員は20人前後。ブラスバンドは早慶戦で協力してくれた。そして、グリークラブ、自動車部、放送部、舞台美術部も。』

50年経ったあとで、私はこの裏話を知り、肅然とした。あの高岡さんがそんなに苦労して廻っていたのかと。胸が詰まった。今なお余韻が残っている。

☆

昭和27年、「早稲田の栄光」

神奈川県平塚に米山公一君(昭和24年法)がいた。昭和27年夏5～6人で長野県上高地へキャンプに行くことになり、米山君を誘った。新宿からの夜汽車の中で、米山君が「早稲田で創立70周年を記念し、学生歌と応援歌を募集しており、学報に載っている。」と言った。「締切はいつだ。」「もう締切かな。」「今からでは間に合わないな。」一時は諦めたものの後を引き、上高地についても鬱々としていた。そのうちに覚悟が決まった。よし、書いて出そう。作詞して駄目なら諦めがつく。メモを取り出した。2泊3日のキャンプが終わり、横浜へ帰って歌詞の調子を整え、「早稲田の栄光」と題を付け投稿した。

早稲田学報(89 6号)には、代表委員の青柳さんが次のように記している。『作詞の審査は服部教授と西條八十先生で、作曲は服部教授の「芥川先生に」。芥川也寸志先生宅に伺い、慶応には「丘の上」がある。名も知らない学生と肩を組んで、同じ喜びに酔う。OBとなっても母校を称える、羨ましく思っている。是非、合唱し口ずさむ歌が欲しいと頼んだ。芥川先生は、目をつぶり考えて、「分かりました。やってみましょう。」と。数週間後に再び何うと、「ああ、出来ていますよ。どうぞ。」と案内された。芥川先生はピアノを弾いて歌って下さった。「栄光は 緑の風に〜」。そして、「学生の皆さんが楽しく歌ってくれば」と謝礼を辞退された。後日、記念品を贈呈した。』

☆

昭和27年10月14日、大隈講堂で発表会。「ひかる青雲」の時と同様にグリークラブの長尾さんが歌唱指導した。秋の早慶戦でも披露された。11月1日からの完全優勝を賭けた早慶戦で3連覇の慶応を破り優勝。大合唱となった。肩を組んで声高らかに、慶応の「丘の上」と並ぶカレッジソングを歌った。

校友の中には、「この歌は全ての早稲田人の琴線に触れる名曲であり、歌うたびに頬をぬらす」という人もいる。昭和52年頃から卒業式直後に肩を組んで歌うようになった。奥島元総長の教務部長時代の発案という。曲のメロディーが式場の雰囲気とマッチしているからだ。芥川先生の名曲のお陰だ。

横浜稲門会の三吉正芳さん(昭和48年政経)によると、「早慶戦を経験しないと早稲田人になれないと

先輩から言われた。確かにその通りだった。早慶戦の応援合戦、応援団席の最上段から横になった校旗がさっと立ち上げられゆっくり進む。その時の応援歌『早稲田の栄光』。生涯忘れられない。あの詞、曲を思うたびに涙が溢れてくる。青春の1ページである。』という。

平成21年10月30日。早慶戦第1日目。30年ぶりで神宮に行った。6対2で早稲田が勝ち、終了後、混雑の中、元応援部監督でその時早稲田の職員として活躍中の石川範行さんと出会った。「これから『早稲田の栄光』です。」と、一般席から最前列の応援席に連れて行かれた。初めてそういう場所で学生と肩を組んで歌った。胸が詰まった。現在、この歌の歌碑が大隈講堂の左の銀杏の木の下に建つ。横浜稲門会の努力が大きい。除幕式では大学幹部が揃い、白井総長、私の謝辞、グリークラブの合唱。生涯の感激だった。早稲田に入って良かった。招待した方の中にいた代表委員だった青柳さんは55年ぶりの握手をしたまま、いつまでも手を離さなかった。

☆

平成8年12月、ペルー、リマの日本大使館公邸が武装ゲリラに襲われた。集まった数百人のうち72名が人質となり、日本人は24名。この中に早稲田OBが2名いた。人質事件は約4カ月続き、翌年4月に解放された。平成9年1月、奥島総長は、大学内の管理職の新年会で、外務省から「早稲田の栄光」を放送して欲しいという申し出があり放送の是非について打診があったと話された。

残念ながら混乱の中「早稲田の栄光」は放送されず、「紺碧の空」が2回放送された。事件終了後、人質の1人、岩本さん(リマ稲門会長、昭和37年法)、もう1人の宮下さん(昭和40年法)は大感激したという。

あの状況下で、リマの空に早慶戦の怒涛の「紺碧の空」が流れたと思うだけで、青春の血がたぎる。

それぞれの時代に帰って早稲田の歌を歌う。早稲田の歌は、我らの心の絆といえよう。



歌碑「早稲田の栄光」

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第69号 2015年12月

発行人：吉田 博行 編集長：地田 博昌 事務局長：安藤 孝
事務局：〒152-0002 目黒区目黒本町6-4-16 Tel 03-3716-7477

2016年 新年会開催のご案内

2016年新年会を、1月17日(日)目黒雅叙園にて下記の通り開催致します。

数々の思い出の詰まった学生時代。その映像は校歌、応援歌の歌声と共によみがえってきます。今回の講演は、「ひかる青雲」や「早稲田の栄光」を作詞された、岩崎 巖氏(1949年 政経卒)を講師にお招きします。同氏は、在学中以来5作の応援歌、学生歌を作詞され、1952年には、大学創立70周年記念歌として「早稲田の栄光」を作詞されました。

神奈川県の高校の教員となられてからも、多数の県立高校校歌を作詞され、今日に至っています。

講演では、応援歌、学生歌の作詞にかかわるエピソードなど興味深いお話が聞けるのではないかと楽しみです。

また、当日は今年の新年会の講演をしていただいた早稲田大学応援部監督の竹沢久喜氏に歌唱指揮をお願いしています。応援部チアリーダーと共に若き日の原点に戻って、応援歌、学生歌を歌おうではありませんか。

初めてのご参加、ファミリーでのご参加も大歓迎です。奮ってご参加下さい。

記

1. 日 時：2016年1月17日(日)16時開会
(受付開始 15時30分)
2. 会 場：目黒雅叙園 2階「華しずか」
東京都目黒区下目黒1-8-1
電話 03-3491-4111
3. 講 演：16時～17時
講師 岩崎 巖氏
演題 歌と人と
－応援歌・学生歌を作詞して－
4. 懇親会：17時～19時
5. 会 費：会員10,000円、ご家族5,000円
当日会場受付にてお支払い下さい。
6. 同封の返信用はがきを、12月25日までにご返送下さい。(田島 記)

岩崎 巖氏プロフィール

1925年生まれ

1949年早稲田大学政経学部卒

1947年 政経学部2年の時、

応援歌「ひかる青雲」作詞。

卒業後も、神奈川県の高校

で教壇に立つ傍ら作詞活動

を続け5作の早大応援歌、学生歌を作詞。

1951年 応援歌「精悍若き」

1952年 大学創立70周年記念歌「早稲田の栄光」

1952年 応援歌「あの眉、若人」

1982年 大学創立100周年記念歌「花の冠」

その他、多数の神奈川県立高等学校等の校歌を作詞。

「サンマルタン運河のまち」「バルビゾンいつかまた」

等の詩集も発表。



各部会からの案内・報告

麻雀部会

☆ 10月25日(日)2区親善大会が世田谷が幹事で、初めて用賀 鈴家で12時20分より開催されました。

世田谷はこの9月よりルール改正を行い、そのルールのもと、雀士世田谷、目黒それぞれ8名計16名で華やかにかつスリングに開催されました。新ルールは何でもありと言う役があればあがれるというものでした。目黒ルールは役があればあがれますが制約があります。我らが星、優勝経験最多の小倉氏が最終回4回戦目で逆転さよならホームランを連発し優勝、2位が世田谷・田島氏、3位が入賞最多の目黒・本田氏でした。

☆ 12月14日(月)目黒区定例大会が武蔵小山 サンにて12時半スタートで開催されます。例会後忘年会を井門にて開催します。皆様奮ってご参加下さい。

麻雀部会長

鶴野洋治